



TITLE:

日食遠征日誌(1): 南洋にて, 軍艦春日より

AUTHOR(S):

柴田, 淑次

---

CITATION:

柴田, 淑次. 日食遠征日誌(1): 南洋にて, 軍艦春日より. 天界 1934, 14(155): 189-191

ISSUE DATE:

1934-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165491>

RIGHT:

## 日食遠征日誌 (1)

南洋にて、軍艦春日より

柴田 淑次

○昭和九年(1934年)一月十五日、月曜日 快晴。

午前十一時、宿を出て直ちに省電にて櫻木町へ。日食の準備品を少し買込む。タキシードにて、突堤へ向ふ途中、偶然京都観測隊の人々に出會ひ、さるレストランにて晝食、ボーイに洋行歸りと間違へられた——事程左様に皆はスマートであつたのである。午後二時半、岸壁より乗船(否、船は帝國軍艦春日であるから「乗艦」である。)東京天文臺、海軍水路部、遞信省の人々、それに、多數の見送人を加へて、甲板は一杯の人。

愈々午後三時艦の出港。軍艦には汽笛も銅鑼もないので何時の間にか突堤も離れてゐる。京都観測隊を見送られた人は折柄上京中の竹田助教授一人。他に較べて聊か寂寥の感なきに非ず。他人のテープを千切つて投げ合つたりしながら、徐々に横濱港外へ。丁度その時佛國軍艦( 號)が碇泊して居たので、互ひに二十一發の禮砲を交した。突堤の人、艦上の人、何時までも互ひに名残りを惜んでゐる。防波堤の燈臺を過る頃、我々はこゝに内地に對し暫しの別れを告げた。

夕方近く甲板士官より寢室の案内あり、各自荷物の整理をする。艦は左に房總半島、右に三浦半島を眺めながら、東京灣の真中を靜かに南へ下る。私の部屋は前艦橋「學生室」と云ふ捺印が押してある汽車の寢臺の様な部屋、東京天文臺の若手連中と共に一室に十人、併し三等寢臺よりは良い。

○一月十六日、火曜日、曇後時化(シケ)。(正午の艦の位置、N 32°26'5, E 141°2'0, 氣温 14°0 C)

午前六時半起床、常の日に比較して實に三時間餘り早い。食堂に出ると皆んな來て居た。八日間この様に早起するのかと思ふと一寸憂鬱になる。併し食後、後甲板に出てみると寒風が身にしみる。氣持がスーッとして蘇つたやう。今朝早く八丈島の東を過ぎた由、愈々太平洋へ乗り出す事となり、一同の氣持が緊張する。

夕方頃より風が出る。雨さへ混つて午後十一時頃には激しい嵐となつた。

艦の動搖が相當大きく、眞直ぐには歩けない。ローリングにピッチングを加へて、前後甲板を怒濤が盛んに越える。水面より十米もある私の部屋にまで波頭がたゞき付ける。フラフラして氣持が悪く、熟睡が出来ない。

〇一月十七日、水曜日、曇り。(正午の艦の位置、N 29°9'5, E 142°41'0, 氣温 18°0 C)

昨夜一晚中シテ、朝になつても波が高い。艦は相變らず動搖が激しい。昨夜の中に石炭が三噸ほど波に浚はれた由。眼が醒めて、早速、觀測器械の荷物を見に行つたが、何も異狀が無かつた。中甲板下甲板に相當海水が浸入したと云ふ事だ。朝食に食堂へ行つたら食事を執つてゐる人は昨日の半數にも足りない。皆んな部屋でごろごろしてゐるらしい。

午後六時、時計を一時間進める。

低氣壓が附近に三つあると聞いた。夜まで波が高い。千田氏が38.5度の熱を出した。風邪らしい。

〇一月十八日、木曜日、曇一時晴。(正午の艦の位置、N 25°37'7, E 144°18'0, 氣温 18°2 C)

今朝早く小笠原島の東を過ぎた。一日中、甲板へ出て海を眺めるが、勿論何も見えない。風は追手、波はないがウネリがとても大きい。艦はピッチングを盛んにやる。空模様は段々好くなつて來て、午後には雲の切れ目より太陽も出た。波の色は濃いインチゴゝ色。黒潮はもう乗切つたらしい。海の深さは三千米より五千米程度。段々氣温が上る。今日は内地の五月頃の氣候だ。

乗込んでゐる外人は米國バークレイのコーン博士、米國バサデナのジョンソン氏、皆んな敬遠してゐるらしい。

午後三時頃より後甲板にて水兵の角力、柔道、劍道等の試合あり、退屈しのぎに見物する。千田氏の風邪は殆んど好くなつたらしい、その代り平井氏が又38度の熱を出して寢込んでしまつた。

〇一月十九日、金曜日、晴一時曇。(正午の艦の位置、N 21°50', E 145°48'5, 氣温 23°0 C)

午前一時、北緯23度半の北回歸線を通つた。愈々熱帯だ、甲板に太陽が照ると少し暑い。

晝食は艦長の招宴で、艦長の祝辭後、東京天文臺の早乙女博士の挨拶あり。ビール、サイダー等を多數に甲板に持出し、一同盛んに飲んでゐた。

夕刻、後甲板にて活動寫眞あり、誰れかが辯士を眞似て一席やつてのけた。午後九時頃、艦の蛇機に故障あり、エンジンを止めて、20分間、太平洋のド真中にて漂流した。一寸心細かつた。

オリオンが馬鹿に高い、天頂近くに見える。カノ|ブス、アケルナ|が判然と南天中空に懸つてゐる。

〇一月二十日、土曜日、晴。(正午の艦の位置、 $N 18^{\circ}13'5$ ,  $E 147^{\circ}11'8$ , 気温  $26^{\circ}5 C$ )

今日より一整に夏服に着換へた。せまい部屋の中は暑い。艦内の生活も残り少なくなつた故。艦内の寫眞を撮り廻る。

午後、士官室にて航海長と秋吉中佐の講話あり、航海術に關しての話であつた。シ|ロスタットのセツティングの計算を少し始める。波の色がとても綺麗なコバルト色、夜は艦の探照燈の演習あり、美しい。

〇一月二十一日、日曜日、晴。(正午の艦の位置、 $N 14^{\circ}36'3$ ,  $E 148^{\circ}35'5$ , 気温  $28^{\circ}0 C$ )

とても暑い、食事をするすると直ぐに汗が出る。シ|ロスタットのセツデングの計算を續ける。今日は日曜なので、艦内で水兵さんの大角力あり。後甲板にテントを張らなければ暑くてやりきれない。雲は水平線に低く、入道雲ばかりで全く夏景色、夕刻より次の講話あり。

一. 日食漫談

荒木博士(京都)

二. 観測の方法

服部理學士(東京)

三. 地磁氣に就いて

速水理學士(上海自然科學研究所)

四. KH層にて就い

伊藤造兵少佐(水路部)

五. 新聞漫談

林氏(東京日々特派員)

午後八時頃、スコ|ル來る。會場を士官室に變更する。

〇一月二十二日、月曜日、晴。(正午の艦の位置、 $N 11^{\circ}3'5$ ,  $E 150^{\circ}3'8$ , 気温  $29^{\circ}5 C$ )

風強し、艦も相當動搖する、然し大分慣れたので、そんなに感じない。愈々明日夕刻ロ|ソツプ島に着く。午前、士官室にて荷揚げの相談あり。京都隊はレオ|ル島へ行く事となつた。海軍と遞信省はロ|ソツプ島、東京隊はまだ定らない。

シ|ロスタットの計算を大體終る。横濱を出てから今日まで島は一つも見えない。七日間は海ばかり、夜は部屋にて蓄音機をかけた。(つゞく)